

初期日系アメリカ文学に関する考察

佐藤 清人

(英米文学)

はじめに

今から30年前に篠田左多江は日系アメリカ文学の歴史を語った論文の中で次のように述べた。

「日系アメリカ文学は（中略）100年の歴史をもって存在するにも拘わらず、アメリカ文学として認められていないばかりか、存在さえも無視されている。今日、アメリカ文学を論ずる時、黒人文学、ユダヤ系文学を除くことはできないが、同時に、日系、中国系、フィリピン系、韓国系を含むアジア系アメリカ人の文学も無視することはできないのではなかろうか。」¹

さて、それから30年を経た今、アメリカ文学における日系アメリカ文学の位置付けはどうなったであろうか。多文化主義が一般の人々のなかに浸透し、アメリカの文化のなかでマイノリティの存在をかつてのようは無視することはもはや困難となった。むろんノーベル文学賞受賞者となった Toni Morrison を擁する黒人文学（これは近年の習いによって、今はアフリカ系アメリカ文学と呼ばねばならない）には遠く及ばないながら、若手のアジア系アメリカ人作家の精力的な活動によってアジア系アメリカ文学の認知度は格段に高まった。今では、アジア系アメリカ文学をアメリカ文学という大きな木の幹から伸びた多数の枝あるいはアメリカ文学という大河に注ぐ支流の一つとして数え上げることに異論を唱える人は少ないであろう。アフリカ系アメリカ文学、ユダヤ系アメリカ文学、アジア系アメリカ文学という大きな枝があり、さらにアジア系アメリカ文学の枝から突き出た小枝として中国系アメリカ文学、韓国系アメリカ文学やフィリピン系アメリカ文学がある。日系アメリカ文学はそうしたアジア系アメリカ文学という枝から伸びた小枝の一つとってよい。

しかしながら、アジア系アメリカ文学あるいは日系アメリカ文学がこのようにしてアメリカ文学という大木の小枝もしくは大河に注ぎ込む支流の一つとして認められたとはいえ、今一度翻って日系アメリカ文学とは何か、あるいは日系アメリカ文学はどのように定義されるのかという問いに直面すると、実はその答えがそれほど容易ではないことに気づく。むろん、まったく定義ができないという訳ではない。今日日系アメリカ文学と呼ばれる作品を産

み出している作家たちは日系アメリカ人三世、四世あるいは五世の作家たちであり、また第二次大戦後の時代に活躍した作家は二世の作家たちであった。彼らに共通しているのは、日本人の祖先をもち、日本人の血を引いているということである。先祖が遠い昔に移民として日本からアメリカにやって来て、その子孫としてアメリカの大地に根を下ろし、英語で詩や小説、エッセイなどの執筆活動を行ってきたということである。したがって、日系アメリカ文学はアメリカにおける日系移民及びその子孫によって産み出されてきた文学とってとりあえずは間違いにならないであろう。

しかし、日系アメリカ文学がひとまずそのように定義できたとしても、日系アメリカ文学の創生期に目を転じ、それはいったいつ始まったのか、また、それはどのようにして始まったのかという問題に焦点を当ててみると、明快な答えを引き出すことは難しい。創生期と目される時代の文学には実に込み入った状況が展開しており、定義や理解を阻む要素が多数存在しているのである。つまりその時代には、文学を産み出す人々の居住地や居住形態、創作で使用される言語、さらにその作品の内容等が多様であり、また複雑に交錯していたことから、一様に捉えることが困難なのであった。小論では、日系アメリカ文学創生期の文学に焦点を当てながら議論を進めていくが、その目的は、創生期における日系アメリカ文学の定義を行おうとする試みではない。むしろ、日系アメリカ文学の創生期における多様な問題を整理し、日系アメリカ文学の定義にまつわる問題の複雑さを明らかにしようとする試みである。

これまでの日系アメリカ文学史

日系アメリカ文学の歴史に関する記述はこれまで幾人かの批評家によって試みられてきた。しかし、その記述の内容と方法は、相互に共通項を含みながらも、微妙に、また時には大いに異なっている。とりわけ、日系アメリカ文学の初期もしくは創生期の時代あるいは日系移民一世の時代に関する記述は多様である。ここではそうした試みのなかから4つの論文を取り上げ、そのあらましを記述してみることにしよう。

最初に取り上げるのはすでに言及した篠田左多江の「日系アメリカ文学の歴史」と題する論文である。篠田は創生期の日系アメリカ文学について「日系アメリカ文学の先駆者達」というタイトルのもと、さらに3つの項目を設けて述べている。

篠田が最初に取り上げているのはサダキチ・ハートマンとヨネ・ノグチ（野口米次郎）の二人の詩人である。サダキチ・ハートマンは1867年に長崎でドイツ人の父と日本人の母の間に生まれた。彼は3歳で日本を離れ、以後は父の実家があるハンブルグで過ごしたが、東洋人の血を引くことによる周囲の偏見から逃れるために1882年にニューヨークへと渡り、米国

初期日系アメリカ文学に関する考察

において文学のみならず美術や写真など幅広く評論活動、創作活動を行った。ハートマンは日本における生活体験も日本語の知識も乏しかったが、英語の翻訳を通して日本の文化を米国に伝えたのだった。

一方、ヨネ・ノグチは1875年に愛知県で生まれた生粋の日本人である。彼は17歳で渡米し、スクールボーイなどをしながら各地を放浪し、その後ウォーキン・ミラーという詩人の知遇を得、彼の勧めによって詩人として立つことになった。ノグチは日本的な詩情を英語で書き表し、英米で少なからず好評を博する一方、日本語で日本と海外の文芸に関する批評を書いた。さらに、ノグチと同じように生粋の日本人でありながら、米国で英詩を発表した詩人としてジュン・フジタや菅野衣川らがいる。篠田がこうしたノグチらとハートマンとをひとつに括った理由は、彼らが日本文学の伝統（短歌や俳句）や日本情緒を英語によって英米に伝えたことによるものと思われる。

篠田が二番目に挙げている項目は「合衆国における日本文学の発生」であり、その中心的人物は翁久允である。翁は1888年に富山で生まれ、1907年17歳のときに米国に渡った。当時の移民の多くと同じように、翁は農場で働き、白人家庭で家事の手伝いをしながら生計を立てた。

ところで、翁が米国に渡った当時の日系人社会ではすでに邦字新聞が発行され、その文芸欄には日系人による小説などの文学作品が掲載され、日系人読者の娯楽として供されていた。そうした作品は米国に移民した人びとの生活や恋愛を写實的に描き、移民読者の興味・関心を大いに引きつけたが、文学的な資質には欠けるものが多かった。翁は移民地における文学がこうした通俗的な娯楽小説に留まっている現状に飽き足らぬものを感じ、「移民地文学」の看板を掲げ、日本文学ともアメリカ文学とも異なる独自の文学を生み出すべきであると主張した。

篠田は三番目に「俳句と短歌」という項目を挙げている。日本からの移民で多少の教養を身につけた人びとのなかには、自ら俳句や短歌の創作にたずさわる者も多かった。俳句や短歌をたしなむ人びとは愛好会を結成し、雑誌を刊行する者もいれば、個人的に邦字新聞の俳句や短歌の投稿欄に投稿して活動する者もいた。俳句や短歌の創作は、質の善し悪しを問わなければ比較的誰にでもできる文学的営為であり、創作にたずさわった多くは農場などで働く一般の人びとであった。

次に藤沢全の『日系文学の研究』を見てみよう。²藤沢の記述の一番の特色は、作家名と作品名、さらに同人会や雑誌の名称を可能な限り多数網羅していることである。ただし、そのあまり、記述の方法には、体系的なものに欠ける側面がある。唯一体系的と言えるのは、分類の方法が年代順になっている点であろう。ちなみに移民初期の文学に関する目次に含まれる項目を以下に列挙すれば、(1)第一期の文学活動について（～1907）、(2)第二期の文学活動に

ついて（1907～1924）、③第三期の文学活動について（1924～）、となっており、目次からそれぞれの時期の特徴を推し測ることはできない。事実、それぞれの時期についても、その時代に発刊された雑誌や書名、活動した文芸団体や作家の名前が余すところ無く列挙され、壯観ともいえるが、時代から時代への変化や推移の特徴を読み取るのは難しい。藤沢の書は日系アメリカ文学全般を取り上げた書としては希有な存在であるが、初期移民文学の問題を体系的に考察する場合に参考となるところが少ないのは残念なことである。

三番目に取り上げるのは、植木照代等が編纂した『日系アメリカ文学：三世代の軌跡を読む』の冒頭に植木自身が「日系アメリカ人の歴史と文学」というタイトルで書いた文章である。³ここで植木は一世の文学について述べているが、そこで植木が取り上げている作家は篠田が取り上げた作家とほぼ同一である。すなわち、翁久允、下山逸蒼、ヨネ・ノグチ、菅野衣川、ジュン・フジタ、サダキチ・ハートマン等である。植木と篠田との相違は、篠田がハートマンとノグチを他の作家とは一線を画する異質な存在として切り離したのに対して、植木はそれらの作家を「一世」の名の下に十把一絡げにしてしまった点である。篠田の後塵を拝したにもかかわらず、篠田が察知したノグチと翁の間に横たわる異質さを植木は無視してしまっている。

一方、植木はこれら作家を生業とする作家の他に、農業や林業など他の仕事に従事しながらも短歌や俳句の創作に携わった多くの素人作家の作品が重要であると説いている。また、これらの作家の重要性については、今後の研究成果を待たねばならないと結論づけており、この点に関しては、植木は篠田の見解を概ね踏襲しているようである。

最後に取り上げるのはスタン・ヨギ（Stan Yogi）による日系アメリカ文学の記述である。⁴これは唯一日本人以外の評者による日系アメリカ文学史であり、そのためであろうか、ここでヨギが言及している作家はいずれも英語で作品を書いた作家だけであり、日本語のみで作品を発表した作家は一人も取り上げられていない。ただし、このことはタイトルが「英語による一世の著作」となっていることから、ヨギ自身が最初から意図したことであることは明白である。しかし、一世の作家として名前の挙がっている作家はサダキチ・ハートマン、『武士の娘』を書いたエツ・スギモト、さらにブンイチ・カガワ（加川文一）の3人である。カガワという必ずしも有名ではない作家が取り上げられている一方、ヨネ・ノグチの名前すら触れられていないのは、実に奇妙な印象を与える。ヨギの記述のなかには、日本語を解さない評者が初期の時代の日系アメリカ文学を論じた場合に示す限界が如実に表れている。

さて、これまで篠田、藤沢、植木、ヨギの4名によって書かれたアメリカにおける初期移民の文学、あるいは一世の文学を概観してきた。次にこれらを比較・検討することによって、そこから浮かび上がってくるいくつかの問題を考察することにしよう。

「一時滞在者」と「移民（一世）」

初期の日系アメリカ移民文学を考察するにあたってまず問題になると思われるのは「移民」と「一世」という言葉の使用に関わる問題である。先に見た4人の評者のうち、篠田を除く藤沢、植木、ヨギの3人は何のためらいもなく「一世」という言葉を使っている。一方、篠田は「日系アメリカ文学の先駆者達」とタイトルをつけ、「一世」という言葉は使用していない。篠田が「一世」という言葉の使用を意図的に避けたかのかどうかは判らないが、意図的であるとすれば用意周到といえよう。「移民」といえば生まれ故郷とは異なる彼の地に根を張り、そこで子孫を残した人びとであり、「二世」、「三世」という子孫があってこそ人は「一世」と呼ばれるのである。しかし、こうした言葉の意味を踏まえたとき、藤沢等が「一世の文学」と呼んだ作家たちのなかにはこうした「移民」や「一世」の定義に当てはまらない人物がじつに多く混じっていることに気づく。

翁久允は1907年に渡米し、1912年に一時帰国してはいるが、再びアメリカに戻り、その後長期に渡って米国で暮らした。しかし、1924年には日本に舞い戻り、それ以降アメリカに渡ることはなかった。翁はアメリカでの長期滞在者ではあったが、移民ではなかったのである。

ヨネ・ノグチは1893年にアメリカに渡ったが、1905年に帰国し、やはり以後アメリカに渡ることはなかった。ヨネはアメリカ滞在中にレオニ・ギルモアとの間に一子（彫刻家イサム・ノグチ）を設け、母子はヨネを追って日本に移住し、しばらくの間日本で生活を送った。イサム・ノグチは確かに米国籍をもつ日系アメリカ人だが、ヨネを一世、イサムを二世と呼ぶのがはたして適切か否かは判断の分かれるところであろう。

下村逸蒼や菅野衣川は米国で長期滞在し、そこで生涯を終えたが、彼等の死には移民として亡くなったというよりは、むしろ長い旅の途上で客死したかのような印象がある。

サダキチ・ハートマンは米国籍を取得した日系アメリカ人だが、ドイツ系アメリカ人と呼んでも差し支えがない。

このように初期日系アメリカ文学の担い手のなかには純粋な「移民」がほとんどいない。こうした事情について篠田は次のように述べている。

「この時期の主な作家に共通する問題点は、大半が永住を決意した移民ではなく、表だって明らかにはされていないが、徴兵逃れの滞在だったという点である。封建的な日本に失望し、合衆国の自由に憧れた。しかし自由であるはずの現実、期待とはほど遠く、排日による障害に直面して挫折する者が多かった。前田河のように英文による創作を目指した者は少なく、大部分の人々は、日本語で創作し、日系人社会の中にとどまっていた。1920年代には

いり、排日土地法が次々と制定され、写真花嫁の入国も禁止され、日本人の存在そのものが否定されるような状態になると、文学活動の中心人物は、徴兵される時期も過ぎていたことから次々に帰国してしまった。」⁵

では、純粋な「一世」たちで文学的な営為に関わった人々はどのような人々であったのだろうか。「移民」として米国に渡った人々の多くは、もともとは農業や自営業などを生業とする人々であった。短歌や俳句の創作にたずさわった人々も趣味のひとつとして新聞の投稿欄に寄稿したのであり、彼等はいわゆる素人作家であった。彼らのなかには、アメリカでお金を儲けた後再び日本に帰るつもりでいたにもかかわらず、思うように金儲けができなかったためにアメリカに留まることになった人びとが多かった。また、初めから移民として永住する目的でアメリカに渡った人でも、多くは農業など実利的な仕事にたずさわることで移民となることを計画したのであって、およそ文筆業を生業とすることを目的としてアメリカに渡り、そこで移民となることを目論むような人はほとんどいなかった。短歌や俳句の創作に関わった一世の人びとの多くは、アメリカでの辛い現実生活から、望郷の念に駆られ、また慰めを求めたために短歌や俳句の創作を行ったのである。「一世」の文人のなかに文学を生業とする玄人の作家がいないのは極めて自然なことであった。

初期の日系アメリカ文学の中心、あるいはその基盤を成したと見なされる人々の多くは「移民」や「一世」ではなく、実は「長期滞在者」であった。「長期滞在者」が「移民」ではない以上、彼らの残した文学を日系アメリカ文学と呼ぶのはいささか適切さを欠くかもしれない。あるいは、「長期滞在者」の残した作品をも日系アメリカ文学のなかに含めるとすれば、それなりの理由付けが必要となろう。先に指摘したように、篠田は初期の日系アメリカ文学の中心となる作家達を「移民」あるいは「一世」と呼んではいなかった。その理由は、そうした呼称がもつ居心地の悪さを篠田自身無意識の内に感じ取っていたからに相違ない。

英語と日本語

二つ目に注目すべき問題として言葉の問題がある。初期日系アメリカ文学の作品には日本語で書かれた作品と英語で書かれた作品とがある。これまで名前を挙げた作家のなかでは、英語でのみ執筆活動を行ったのはサダキチ・ハートマンとジュン・フジタだけである。ヨネ・ノグチや菅野衣川等は英語と日本語の両方で作品を書き、その他の小説家、一般人の歌人・俳人はもっぱら日本語で作品を書いた。

二世以降の世代によって書かれた日系アメリカ文学作品のほとんどが英語で書かれたものであることを踏まえたとき、このように日本語作品と英語作品が入り交じった状況はどのよ

初期日系アメリカ文学に関する考察

うに見なされるべきであろうか。冒頭に日系アメリカ文学はアジア系アメリカ文学の支流であり、そのアジア系アメリカ文学はアフリカ系アメリカ文学やアメリカ先住民文学と同じように、アメリカ文学の支流であることを指摘した。アメリカ文学にはいくつもの支流があるとはいえ、そこに共通しているのは、作品が英語で書かれているという一点である。たとえばさまざまな民族の言語に特有な単語が部分的に散見されることがあっても、文章は基本的に英語によって書かれている。中国系アメリカ文学のなかに全文中国語で書かれた作品が混じっているということはなく、アフリカ系アメリカ文学のなかにアフリカの言語で書かれた作品が存在するなどということもない。日本語で書かれた作品を日系アメリカ文学のなかに含めるとすれば、それは極めて希な状況と言わなければならない。

しかしながら、日系以外の他のマイノリティのアメリカ文学が英語以外の言語による作品を含まないからといって、日系アメリカ文学からただちに日本語作品を排除してしまうのは早計であろう。後に改めて言及するように、日本語で書かれた作品のなかには日系移民初期の暮らしぶりをよく伝えているものがあり、また、二世作家が英語で描く一世の姿とそれを比較することは実に興味深い研究だからである。ヨギが日本語作品をほぼ完全に無視してしまったことは、おそらくその評者が日本語をほとんど解さなかったためであろうと推測され、やむを得ないともいえるが、日系移民初期の文学がもつ豊かさを極めて矮小化してしまっている点は指摘しておかねばならない。

日本語文学と移民地文学

「一世」や「移民」によって書かれたものであれ、また「長期滞在者」によって書かれたものであれ、日本語で書かれた作品を日系アメリカ文学から排除するいわれはない。だからといって、移民初期の時代にアメリカに渡った経験を持ち、アメリカについて日本語で書かれたすべての作品が日系アメリカ文学に含まれるわけではない。この点について藤沢は、次のように示唆的かつ有益な記述を行っている。

「はじめに断っておかなければならないのは、いかに在米中に作品を作ろうとも、それらが未発表のまま日本へ送られたり、持ち帰って日本で活字化したもの、及び旅行者や短期滞在者による創作のたぐい、かつまた、帰国者や非アメリカ体験者による日本語での寄稿作品などは、これを純然たる国内文学と認め、本書でいうところの日系文学のカテゴリーに含まれないものとする。

したがって、例えば一八六〇年（万延元）の遣米使節団の正使新見正興が、「あつまれる国の司にわが君のあふせつたへて帰る嬉しさ」と歌い、副使の村垣範正が、「我君のあふせ伝へ

てたちかへる旅の衣ぞのどかなりける」の一首を現地で物そうとも、また、アメリカを見聞した永井荷風が『あめりか物語』（明治41、博文館）を、田村松魚が『北米の花』（明治42、博文館）を、有島武郎が「かんかん蟲」（「白樺」明治43・10号）を、正宗白鳥が「亜米利加素描」（「中央公論」昭和12・5号）を、井上靖が『わだつみ』（昭和52、岩波書店）を、山崎豊子が『二つの祖国』（昭和58、新潮社）を世に問おうとも、決してアメリカに於ける一世の文学たり得ることはない。」⁶

藤沢はここで日本語作品と英語作品の違いにこだわってはいない。また、作者が「移民」であるか「長期滞在者」であるかにもこだわってはいない。藤沢が問題にしているのは、作品がアメリカの現地で発表もしくは刊行されたか否かということの一点である。こうした藤沢の判断基準は実に明快であり、概ね妥当なものを見出すことができよう。

藤沢は「移民」と「長期滞在者」とを区別していないが、「短期滞在者」と「長期滞在者」との間で線引きをし、前者を日系アメリカ文学から除外している。すなわちそれはアメリカを旅行した者とアメリカで生活した者とを区別したということであり、文学作品の中身に関していえば、アメリカでの日本人の旅の印象を書いたものとアメリカでの日本人の暮らしを描いたものとを区別したということである。アメリカでの日系アメリカ人の生活を描いた井上や山崎の小説が除外されているが、それらはいわば外国を舞台にした歴史小説であり、明らかに日本文学だからである。

翁久允は、すでに述べたように、「移民地文学」という日本文学でもアメリカ文学でもない独自の文学領域の開拓を目指していた。移民地アメリカにおける日本人の生活を描いた小説、移民地での暮らしや母国日本への望郷の念を多く綴った短歌や俳句は、たとえ「移民地文学」という名の下での活動でなかったとしても、すべて「移民地文学」という呼称を与えて差し支えないであろう。また、翁は自分の文学がアメリカ文学とも日本文学とも異なることを意識していたが、当時は日系アメリカ文学という呼称はなく、「移民地文学」という呼び名を使ったままである。日系アメリカ文学という呼称が市民権を得た今日、「移民地文学」は日系アメリカ文学のなかに含められてしかるべきであろう。

英語文学と日本文化

初期日系アメリカ文学において英語で作品を書いた作家の代表格はサダキチ・ハートマンとヨネ・ノグチの二人である。サダキチ・ハートマンはすでに述べたように、日本人女性とドイツ人男性の間に生まれた混血児であり、ドイツ経由でアメリカへ移民し、そこで多方面に渡って活躍した。自ら文学作品を創作する一方、ヨーロッパや日本の文芸に関する批評も

初期日系アメリカ文学に関する考察

書き、日本の文化をアメリカに紹介するうえで大いに貢献している。しかしながら、はたしてハートマンを日系アメリカ文学という範疇に含めることは妥当なことであろうか。

ハートマンの生まれや生い立ちは明らかに一般の日系移民とは異なっている。彼は日本の文化や文芸を紹介したが、それは日本における実生活や実体験を通して得られたものではなく、英訳された書物を通してであった。したがって、彼の日本文化に関する書物は、ヨーロッパ人による日本文化の研究書とさほど変わるところがないと言えなくはない。またハートマンは、アメリカにおいて日系社会や日系人と交わることもなく、アメリカにおける日系移民の生活にも無関心であった。彼の著作を通して日本の文化に関心を持った欧米人もいたであろうが、彼の作品から日系移民について知ることはできないことであった。

移民初期の時代に英語で多数の作品を残したもうひとりの作家はヨネ・ノグチである。この時代に作家としてアメリカで出世を夢見た人は少なかったが、ノグチはそうした希有な人物の一人であった。ノグチは17歳という若さでアメリカに船出し、渡米当初はさすがに彼も新聞配達やスクールボーイや掃除夫などの仕事をせねばならなかった。しかし、やがてウォーキン・ミラーという詩人の家に寄寓しながら詩作の腕を磨き、雑誌に彼の詩が掲載されることによって周囲の耳目を集めることとなった。

ノグチの作品もまた多岐に渡っている。詩、小説、批評そして日本文化を紹介する散文など。詩の場合には、英米の偉大な詩人達の影響を受けつつも、英米人とは異なる言葉づかいや東洋的な思考で読者の賞賛を得た。小説ではアメリカを訪れた若い日本人の娘を主人公にして、彼女が異文化のなかで味わうさまざまな体験を日本の文化と比較した。日本の文化に関する文章では、日本の古都や四季や植物など、日本特有の文化や習慣の紹介に勤めている。

このように多彩なノグチの英語による文筆活動は日系アメリカ文学という範疇でどう位置付けられるのだろうか。どのような文学形態であれ、ノグチの作品は基本的に日本人と関わりがあるとしても、日系移民とは関わりがない。アメリカに滞在する日本人娘を描いた作品にしても、それは日本人滞在者のアメリカ体験を描いたものであり、日系人の生活を描いたわけではない。日本語で書かれたものならば、日本人のアメリカ体験記など無数存在するといっても過言ではない。要するに、サダキチ・ハートマンの場合と同じように、ヨネ・ノグチの場合にもわれわれはその作品のなかに日系移民と関わるような内容を見いだすことは難しい。サダキチ・ハートマンとヨネ・ノグチはこれまでさしたる根拠もなく日系アメリカ文学に含められてきたのであるが、作家あるいは作品としての彼等の評価はともかく、日系アメリカ文学として扱うことについては多分に疑義が残る。今後再考を要する問題といえよう。

一世文学と二世文学

どの国の、あるいはどの言語の文学史を眺めてみても、ある時代と次の時代には何らかのつながりがあるものである。後の時代が前の時代の文学の流行を継承する場合は、逆に前の時代の流行に反発し、前の時代とは正反対なスタイルを産み出す場合もある。英文学史から例を引けば、前者の例はヴィクトリア朝の詩とロマン派の詩との関係であり、後者の例は古典主義の詩とロマン主義の詩との関係であろうか。後の時代が前の時代を継承するにせよ、あるいは絶縁するにせよ、両者の間には何らかの関係がある。しかも、時には極めて密接な関係がある場合も少なくない。

ところで、日系アメリカ文学における一世と二世の文学の間にはどのような関係があるのだろうか。篠田はこの点に関して次のように記述している。

「一世の下級労働者としての苦しい生活の中で育った二世は、大学教育を受ける者が多かったが、彼等の学問は、すぐ職業と結びつき、さらにはよりよい生活に直結するものでなければならなかつた^[ママ]。大学でも医学、法学、農学などの実学を学び、文学を志す者は稀であった。また日本語が不完全であったり、日本的なものに背を向け、よりアメリカ的になってアメリカ社会に受け入れられようとする生活態度から、一世の移民地文学を理解しようとする者もなかった。一世文学は1930年代になると中心的人々を失い、二世文学もまだ初期であったため日系アメリカ文学の低調な時代となった。」⁷

二世の小説家ヒサエ・ヤマモトの短編小説のなかに代表作『十七文字』という有名な作品がある。そのなかで、主人公であるロージーは母が日本語で書いた俳句が理解できないのだが、理解できたような振りをする。一方、母親は思春期の娘ロージーの胸に芽生えた異性に対する恋心を理解できずにいる。この小説は、一世と二世の間に横たわる言葉による断絶をモチーフの1つとしているが、そうした断絶は日系アメリカ人の文学史のなかにも見られるのである。『十七文字』はそうした一世と二世との文学の断絶を寓意的に表現した物語として読むことができるかもしれない。

しかし、すべての一世と二世の間にこうした断絶があったわけではない。この点について指摘しているのは藤沢である。藤沢は二世の文学を帰米二世の文学と純二世の文学に分けている。帰米二世とはアメリカで生まれた後、幼少時から青年期にわたる時期を日本で過ごし、その後再びアメリカに戻った二世である。帰米二世は日本語と英語のバイリンガルだが、どちらかといえば英語よりも日本語に堪能な者が多かった。こうした事情から、帰米二世で文学作品の創作に関わる者は日本語と英語の両方で創作する場合があり、日本語で創作

初期日系アメリカ文学に関する考察

する場合には一世の作家と通じるものが多分にあった。一方、アメリカで生まれ育ち、日本で過ごした経験をまったく持たない純二世は日本語をほとんど理解しなかった。一世の文学に対する純二世の反応は、『十七文字』の主人公ロージーが母の俳句に示した反応に概ね等しかったに相違ない。

帰米二世作家の一部の例を除けば、一世文学と二世文学の関係は極めて希薄である。その原因は単に言葉の問題だけではない。なぜなら、サダキチ・ハートマンやヨネ・ノグチのような英語作家ですら二世作家とは何ら影響関係を持たなかったからである。二世のなかには、日本とアメリカの間で自分のアイデンティティに苦しみ、真のアメリカ人になるためにあえて日本の文化を遠ざける人々も多かった。日本の文化の紹介に貢献したハートマンやノグチの作品が二世作家の反発を呼んだわけではない。いっそその方がハートマンやノグチにとってはまだましであったかもしれない。ところがそうではなく、彼等の作品はそもそも二世作家の関心の埒外にあったのである。

このように、一世の作家と二世の作家との間には極めて希薄な関係しかない。むしろ断絶があると言ってよいかもしれない。しかしながら、このことは一世の作家と二世の作家を比較したり、並べて論じたりすることが無効であることを意味しない。なぜならば、一世の作家と二世の作家の間には直接的な影響関係はほとんどないが、共通な話題やテーマを描いている場合が少なからずあるからだ。翁久允は日本語によって移民地で暮らす日本人を描いたが、トシオ・モリヤヒサエ・ヤマモト等の二世作家は英語で一世の生活を描いている。共通な話題を異なった言語で書いた彼等の作品を並べて検討することは、日系アメリカ文学というよりは、むしろ比較文学の領域に属するかもしれない。いずれにしても、こうした比較検討が可能である。今までのところそうした比較研究は数が少なく、今後なされるべき研究課題ということになる。⁸

日系アメリカ日本語文学と日本文学

日系移民もしくはアメリカにおける長期滞在者が書いた日本語文学について、それらと日系アメリカ文学の関係については前に述べたが、ここで日本文学との関係について一言触れておこう。日本語で短歌や詩を書いた名も無き無数の日系移民たちの作品が日本文学史のなかで言及されることはまずない。翁久允については、一部の文学史のなかで昭和初期プロレタリア文学が隆盛を見た時代に、それに反対する作家たちの集団「13人倶楽部」が結成され、その構成員の一人として翁の名前が散見される。日本文学史という文脈のせいであろうか、「移民地文学」を提唱し、移民文学に貢献した作家としてではなく、反プロレタリア作家の一人として名を留めているのである。

一方、ヨネ・ノグチは英語だけではなく日本語による著作も多数あることから、日本文学史においても、しばしばその名を発見することができる。しかしながら、その扱いは文学史の評者によって異なっており、まったく無視されてしまっている場合も多々ある。こうした日本文学におけるノグチの評価について堀まどかは、ノグチが戦時中日本のナショナリズムに加担する詩を書いたこと、また、萩原朔太郎がノグチの詩を外国人の詩であると評したことなどをその理由として挙げている。¹⁰要するに、作品の価値・評価以前の問題として、翁やノグチが位置する日本（語）とアメリカ（英語）の二重性のために、彼等は日本文学のなかでも必ずしも安定した居場所を見つけられずにいるのである。とりわけ、ノグチの場合には、英米文学はもとより、日本文学さらには日系アメリカ文学のいずれにおいてもその居場所を定めることができなるとすれば、いったいどこに居場所を求めればよいのであろうか。ノグチ個人への関心が徐々に高まりつつある今日、それもまた新たな課題のひとつであろう。

おわりに

日系アメリカ文学の創生期あるいは初期の時代には、これまで見てきたように、さまざまな問題が複雑に交錯している。作家自身をめぐる、移民と滞在者のいずれかという問題、作品が書かれた言語が日本語か英語かという問題、作品の内容が移民の生活に関わるものかあるいは日本の純粋な文化に関わるものかどうかという問題。こうした問題がときに交錯し、捻れ合うことによって問題はさらに複雑な様相を呈している。小論の目的はこうした捻れをひとつひとつほぐしていく試みであったが、はたして目的は十分に達し得たであろうか。冒頭に述べたように、小論は初期の時代における日系アメリカ文学を定義する試みではない。定義することの困難さがどこにあるのか、それを明らかにしようとする試みであった。初期の日系アメリカ文学について、これまではただ年代記的に作家や作品名を列挙することによしとする傾向があったように思われるが、そこには実に多様な問題が未決のまま残されている。今後こうした問題が新たに議論されるきっかけとなれば、とりあえず小論の目的は達成できたといえよう。

初期日系アメリカ文学に関する考察

注

- 1 篠田左多江「日系アメリカ文学の歴史」『アメリカ研究』第14号（1980年）， p. 63.
- 2 藤沢全『日系文学の研究』（大学教育社，1985年）参照。
- 3 植木照代「日系アメリカ人の歴史と文学」植木照代，ゲイル・K・佐藤（編）『日系アメリカ文学：三世代の軌跡を読む』（創元社，1997年）， pp.v-xxiii参照。
- 4 Stan Yogi, “Japanese American Literature,” in King-Kok Cheung, ed., *An Interethnic Companion to Asian American Literature* (Cambridge: Cambridge U P, 1997), pp. 125-55参照。
- 5 篠田，前掲論文， p. 70.
- 6 藤沢，前掲書， pp. 45-46.
- 7 篠田，前掲論文， p. 72.
- 8 山本岩夫が翁久允の描く移民の姿と二世、三世の描く一世の姿を比較することの重要性をすでに説いたことがあることを中郷美美子は指摘している。中郷美美子，「「移民地芸」の先駆者翁久允の創作活動—「文学会」の創設から『移植樹』まで—」『立命館言語文化研究』3巻6号（1992年）， p. 3.
- 9 大岡信は日系アメリカ人の短歌を編集、収録した『北米万葉集—日系人たちの望郷の歌』（集英社新書，1999年）のなかで、「北米にはいくつかの短歌会があって、中心的な人物もいましたが、指導者と呼べるだけの人はいませんでした。専門歌人がいなかったことも原因の一つです。新聞の選者にしても、ちゃんとした短歌の教養があったとは思われません。言葉遣いの誤りや文法上の間違いなどが、添削もされずにそのまま掲載されているのをみても、指導がなされていないことが判ります。（中略）個々の歌には、技術的な面からだけみれば、取り立てて優れていると言えないものも数多くあるものの、そこには移民の心情や、祖国への痛切な思い、異国での生活の切なさなどは、せつせつと表れています。」（pp. 14-15）と述べ、日系アメリカ人の歌がその歌に込められた心情はともかく、技巧的には一般的に稚拙なものであったことを指摘している。それが日系アメリカ人の歌が日本文学史のなかで等閑視される主たる原因かもしれない。
- 10 堀まどか「象徴主義移入期の芭蕉再評価—野口米次郎のもたらしたもの」『総研大文化学研究』第2号（2006年）， p. 60.

On the Early Age of Japanese American Literature

Kiyoto SATO

Today Japanese American Literature is recognized as one of several ethnic literatures included in American Literature as well as African American Literature, Native American Literature and so on. *No-No-Boy*, the novel by John Okada, Nisei (second generation) writer is one of the canonical books read in Asian American Studies, and some books by Cynthia Kadohata, Sansei (third generation) novelist are highly popular among the masses and awarded a literary prize.

In the early age of Japanese American Literature, however, the writings of Japanese people in the US were diverse and inconsistent. Some were written by the immigrants, and others by the sojourners. Some were composed in English, and others in Japanese. Some described the life of Japanese immigrants, and others gave an account of Japanese culture and art.

In this paper I will try to disentangle the complicated situation of the writings in the early age of Japanese American Literature.